
霊冥解凶

永良隆樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

霊冥解図

【Nコード】

N3949G

【作者名】

永良隆樹

【あらすじ】

種別：神話系ホラーファンタジー。 / 祖の序、五話掲載。 / 曲異記魚人村掲載。 / 曲異記屍村掲載。 / 曲異記悪領主掲載。 / リスト記載。 / 蛙門帰還掲載。 / 禰黒文・霊冥解図、序掲載。 [2009 / 3 / 19]

曲異記、魚人村（前書き）

小作開いてくださいます、ありがとうございます。
冒頭五話のみ、掲載します。

曲異記、魚人村

昔、田代の磯辺に、太郎という賤しずのの男あり。

世にすぐれて貧しき人なり。

いをとりのおのこ（漁夫）なり。

うろくずをとりて過ごさんとて、浦へ出て小船に乗り、沖中へ漕こぎ
いだし、日々釣を垂れり。

日々いろいろの魚を釣りて、その身を養ふ。

ある日嵐にあふ。

波風荒くして太郎の小船を流すこと三日。

銀黄金しろかねがねの甕かめが並ぶ、不思議の島に着く。

「これはいかなるところか」太郎驚き島に上れば、

うるわしき人々現われ出で、寄り寄りて太郎を迎ひ、

主人の家へと連れてゆく。

主人なのめに喜びて、太郎に申すやふ。

「ここは訪れる人もなき、島なり。

島豊かなれど、子宝に恵まれず、伝え遺すべき子孫絶えんとす。

我に娘あり。夫婦めととなりここに暮らし給へ」

見れば姿うるわしきおみなの十七八が、そこにあり。

太郎「冥加みよつがもなきこと」と断れども、

主人譲らず笑みを含ひみて申ますよふ「なにとぞ」

つひには太郎も「おうせに従したがうべし」と申しける。

かうして、太郎島に暮らせども、

家の人々の様子に隠すこと多くあり。
夜に姿を現さぬこと。

閉じた部屋の多くあること。
海上より怖ろしき声の聞こえること。

天をつかぬばかりの怖ろしげな門の社あること。
生魚を骨ごと喰らふこと。

ある日女房の鼠を隠れて喰らふを見る。

太郎、おじおののきて恐れをなし姿を隠す。

「これは鬼神の島に違ひなければ、
我來たる船を捜さん」

されど家を出たるところでその女房追ひつきて、

そのときには女房の顔かに魚と違わぬうるこのあり。
太郎逃げ惑へば、

女房呼ばひて魚人こぞりて現れ出で、

そこにあの主人の姿もあり。

さてはここは怖ろしき魚人の島なれば、

我が命もこれまで、と、太郎おぢ惑ひ狂い駆ける。

そのとき、ひとりの男おの、刀を持ち、道に現れる。

年の頃は十八九にしてあどけなき顔かなれど、

そのまなこは狼に似たり。

太郎、すがりて申すやふ。

「助け給へ」

男おの無言でうなずきて、魚人の群れを寸寸すんすんにうち倒し、曰く。

「この島に怪物の子あり。

狗斗壘^{くしゆらふ}卓という邪神の子なり。

この世界に在りうべからざる靈異^{りやうい}なれば、
この剣にて退治せしむ」

太郎なのめに驚きて、問う。

「その刀は」

「まが切り、なり。

またの名を、渦生ひ（うずおひ）乃劍。

この刃で斬られしものはたとへ魂靈^{たまひ}といえども、
天地開闢前の渦にのみ込まれ消え失す」

「狗斗壘^{くしゆらふ}卓とはいかような者か教え給へ」と問えば、
おのこ答へて曰く、

「悪しき龍なり。この島にあるはその子供なり」

太郎思ひあたるところあり、

「それはあの社に違いなければ、
われに案内^{あなひ}させ給へ」

と、おのこを、あの天をつく門の社へ連れて行く。
おのこ惑わずなかへはひる。

太郎、おのこにつき従ひて社の中にはひれば、
怖ろしき龍の姿のあり、

それは龍に似たれども、もって異なるものにて、
鉤爪のある手足は長けれど龍に似ており、
かうべも竜に似たものなれど、
胴は醜く太く、ぬめぬめとぬめり、
怖ろしげな突起で蔽われており、

見上げること、小山のようにして、
太郎、言葉を失ひて立ちつくす。

龍、嗤ひなにかを言ひかけたけれど、
おのこ龍に口を開く隙を与へず、三度斬りつけり。

傷口に混沌の渦の生じおほきくなり、
叫び号おらぶ龍をのみ込み、

やがて渦とともに龍は消えうす。

太郎、我に返りたるときには、
おのこの姿無し。

太郎、小船を捜し、海を彷徨さまよひ、漸ようう故郷の浜に戻る。

よろよると陸おかへあがり、
浜をよろめき歩けども、
そこにそのまま倒れ伏し、
息絶へり。

すでに魚人により精気を吸われたる由。

曲異記、屍村

ふたりのさぶらい（侍）ありき。

巳乃国みのくにそふのかみのこぶり添乃上乃郡の山中に、

迷ひ来たり。

日暮れて先の見えなくなる頃に村ありて、

宿を請わんと家々を訪ねるも、ひとりの人の姿も見えず。

不思議に思い途方にくれたれば、闇の中に無数の人の姿現れ出ずる。

されど、その歩くさまいかにもおぞましくあり、

不審に思ひて刀を抜き近づけば、屍なり。

7

連なりて立ち歩き、ふたりを襲い噛まんとすれども、

もともと豪胆なるふたりなれば、

太刀をふるひて屍を斬り伏せ追いはらひ、

道を探し駆ける。

やがて村の外れの山中に、

紫の煙けぶり立ち出でる洞窟のあり、

なかから怪しげな呪詛の声の漏れ聞こえる。

太刀抜ひたまま、なかへ入れば、

裸のなんによくみがひてあり、
鍋にみどりこの煮られたる。

「これは怖ろしき様なり」

「許せぬ悪魔の業」

と、ふたり刀を連ねて、人々を斬り、
人ら怖ろしきまがごとを吐きつつ斬られたり。

人皆斬り伏せて表へいずれば、
闇の中に怖ろしき化け物の姿あり。

そのかふべは山羊に似て、
その体はおみななれど、
胸には無数の乳房が垂れ下がり、
腰から下は獣なり。

すぐさま闇の中に消え失せる。

ふたり言葉を失ひて、
立ちつくし、

漸おとうひとりが発せるは、

「あれは何者ならん」

「爾虞羅主にあり」

見れば若きおのこがそこにあり、
年の頃十八九にして幼きかほなれど、
そのまなこ狼に似たり。

刀を手して申すやふ。

「ふたり退さられ給へ」

「あれはこの世にあらざるべき邪神なれば、
我が刀で退治申さん」

「神を屠り給ふか」

ふたり驚きて問うと、おのこ刀を見せり。
奇異な刀にして、その柄はいっそく壱束。

「まが切り、なり。」

またの名を、渦生ひ乃劍。

三度斬りつければ渦を生じ、
神と言へども、失せ果てる」

「御身、いかなる人にて在らせられ給ふか」
ふたり聞けば、

「廻靈法師と邪霊ら我を呼ぶ。」

されどその名の意味は我も知らず」

おのこ答えり。

そのときふたたび屍の群れ現われ、

ふたりの侍、おのことともにうち倒す。

おのこ刀をふるえば、屍の肉寸寸に飛び散る。

見れば邪神爾虞羅主の姿そこにあり。

高き声で嗤う。

おのこ、その腹に斬りつければ、

邪神の腹は裂け飛び散り、中に光の渦の生じる。

されど二太刀目を斬りつけんとしたとき、

邪神の腹より五頭の小さき龍の飛び出しておのこに喰らいつく。

龍、天へ消えうせ、邪神嗤ひて姿を消す。

ふたりの侍、おのこに駆け寄り助け起こせども、
すでに息耐えり。

さらに、闇の中にすでに何者の姿もなし。

ふたりの侍、おのこを弔ひ、
刀を持ち帰り主君に献上せり。

主君、驚きて、人をやり村を焼き払う。
さらに、刀を山背の丹治比たしひの社へ奉納せり。

その刀、百年の間社あひだにあれど、
火事にあひ失せる。

曲異記、悪領主

凶領主あしきあり。

みめよき娘子のあれば、

これをとりて弄り、

殺してはししむら（肉）を食らふ。

あまたとりて行く。

家臣いさめれども聞かず、これをも殺す。

領民失せはて郎党逃げ去る。

所領荒れ果て草ばうばうとなり、人の姿まれとなりぬるも、
領主悪行を止めず。

ある夜、ひとりのおのこ屋敷に討ち入りて、
これを殺す。

領主斬られ倒れしが、
その屍から黒き渦巻く影の現わるる。

渦巻く影の中に獣の口が現われ啗う様。

愚かなり。人間。

我を滅ぼすことかなわず

おのこ晒い返し申すよふ。

「悪魔、晒わせるな。
これは冥界の剣なれば、
霊さえもこの切っ先から逃れ得ず。
天地開闢の渦にのみ込まれよ」

かく吐きて、三度斬りつければ、
影の中に混沌の渦生じ、
雷電雷らいでんいかづちの如く声あげる影をのみ込み消えうす。

おのこ刀をおさめ、
「残り、四千二百八霊」
つぶやき立ち去る。

翌日領民、領主の殺されたことを知るが、
おのこのことは誰も知らず。

リスト

『ネクログミ禰黒文』より、邪神。

畏虞、
豫虞、
陀胡鵠、
狗斗鵠阜、
亞坐菟主、
爾虞羅主、
黍胡主。

『靈冥解図』より、悪魔

。

亞那琥、
亞畏鵠、
巴菩婁鵠、
凌武那琥、
駕彌祁鵠、
琥羅奢、
呂乃慧、
真婁巴主、
芭婁芭主、
巴羅畏、
毘賦炉主、
賦婁祖鵠、
羽畏紋、
它裏璽鵠、
武衛婁、
火鈞禍龔、
火婁禍主、
芭衛婁、
芭羅鵠、
賦婁禍主、

真婁芭主、
マルバス
賦呂祁婁、
フロケル
婁武那琥、
サフナク
巳土那畏、
シドナイ
奢琥主、
シヤクス
宇禰、
ウネ
它羅禍、
タラカ
宇羅玖、
ウラク
芭亞龔、
バアル
辺利亞龔、
ベリアル
辺利人、
ベリト
胡母利、
コモリ
戊蠹主、
ボトス
武禰、
フネ
禍訖鷓、
カイム
悪虞、
オグ
火羅主、
ホラス
朱免利、
シュトリ
亞駕主、
アガス
亞炉祁龔、
アロケル
天畏母鷓、
アマイモム
坐駕鷓、
ザガム
奢琥婁賦、
セケルフ
婁黎、
セレイ
王龔是芭武、
オルセハム
菟羅琥、
ウラク
阿守婁、
アスル
芭免尹、
バトイン
虞鼠尹、
グソイン
虞巳鳴鷓、
グシオム

禍羅毘亞^{カラヒア}、
畏火主^{イホス}、
鳴羅畏^{オライ}、
賦呂祁婁^{フロケル}、
婁婁真琥^{サルマク}、
胡亞婁^{ウアル}、
子蠹羅主^{ストラス}、
是芭婁^{ゼバル}、
胡巴婁^{ウハル}、
胡賦羅^{ウフラ}、
菟鈿主^{ウロス}、
賦婁賦婁^{フルフル}、
巴婁巴主^{ハルハス}、
毬貔武^{メリヒム}、
王路馬主^{オロハス}、

他、一万靈（現時点で残り四千二百八靈）。

蛙門、帰還

ううん、……。。

これは、俺は死んだのか……。

死んでいるとしか思えん。

ううん……。三十歳で死ぬとはひどいじゃないか……。

まあ、別にいいけど……。

それにしてもなんだってこんな変な世界にいるんだ……???

小説家なんて商売やってたせいなのか??

なんだか、妄想的な死後の世界ぢやないか……。

変な虫の声がしてるし……。気持ち悪つ。

まあ、いいけど。

それにしてもじめじめしてる。

羊齒しだだの蕨つただのが生い茂りまわりが見えない。

天国、、じゃないよなあ。この感じじゃ。

もつとも、地獄というほどでもなさそうだが……。

とりあえず歩いてみるか……。

でも、どっちへ行きゃあいいんだ？

あ、誰か来た。人みたいだ。

げげ、人じゃない。蛙人だ。

ひよろ長い手足、ぬめぬめした体、大きな口、蛙の女だ。

かわいいなあ。

ん、なんで?? 何を考えてるんだ??

相手は蛙だぞっ!?

がっ、俺もいつの間にか蛙になってるじゃないか!?

水かきのある手、丸いお腹、顔を触ってみれば、目が飛び出てて口が大きい……。

ううん、なっちまったものはしかたない……。

それでかわいく見えるのか……。しかも裸だし……。

「お迎へにありがとうございました」

ううん……。声もかわいいじゃないか……。

「そんなことよりも、よい事をしませんか？」

むむ、我ながらなんてアプローチだ。

蛙になって品性下劣になったのか？

とはいえ、お互い裸だもんなあ……。

あ、そっぽ向いちゃった。

「いけません。そんなコトをしては叱られてしまひます」

ううん。やっぱりダメなのか。恥じ入る感じもかわいいんだけど。

「こちらからお入りください」

ううん。なんだこの扉……??

随分景色が変わったぞ!?

あれ、あの子は?? どこ行っちゃったんだ?? もう、いないのか……???

残念だなあ……。

とはいえ、ここは随分と明るいな。

気味悪い声も聞こえなくなった、し……。

あれ、いつの間にか毛が生えている。

全身、毛むくじゃらじゃないか!?

しかも、顔も毛だらけみたいだし、尖った耳に、短い角まであるぞ。

ううん、鏡が見てみたい。なんになつたんだ?? 俺。

あ、人だ。

誰だ?? この女は?? 光ってるぞ。神か??

さっきのベツピンさんと比べたら、随分とブスじゃないか。

「煉獄を抜け、よくぞ来た……」

「煉獄?? 煉獄ってなあ、もつと違う感じだと思っていたが……。

ダンテの神曲読んだことないのか?」

あ、笑いやがった。

「煉獄とは、その魂に存在するもの」

「するつてえと、つまり、なんだ？　俺は蛙が適当だった、って
言いたいのか??」

「……」

あ、答えない気だな。まあ、いいや。

「お前は誰だ？」

「我はこの宇宙が始まる以前の、旧宇宙よりこの異界に在りし者」

「神か？」

「否、我もまたひとつの古ひ霊である……」

「するとここは、なんだ？　どこなんだ??」

「冥界の片隅の、ひとつの次元である。

旧宇宙より変わらぬ只ひとつの世界。

二百年ぶりゆえ、憶えておらぬか？」

「え!?!　何を言いやがる。するつてえと、俺はここに以前もいた
のか??」

「汝は扉の霊、蛙門^{アモン}なり。

汝は冥界と現世を自在に行き来できる霊である。
異なる次元の世界への扉を開くこともできる。
思い出せぬ、か………？」

「ああ、そう言われればなんとなく………」

お、いきなり刀が出てきやがった………。

そつだ。こいつは………。

「この刀を届けよ」

ああ、廻霊なんかのだったな………

襦黒文・靈冥解凶、序

大都會の暗がりの中。

ひとりの男が、歩いている。

狩り、をしている。

暗闇を伝い歩き獲物を捜している。

獲物は人であり、

もう何年も、それを繰り返している。

さらい、弄り、最後には殺す。

その男の前に、ひとりの少年が立ちはだかる。

十六・七歳。

あどけなくも見える顔。が、狼に似た眸子。

ボア付きのコート、ジーンズにスニーカーといういでたち。

ポケットに手を突っ込んだまま、男の行く手を無言でふさいだ。
闇の中に光る、氷のような眼。

男が嗤う。

「貴様は？」

少年も口に晒いを浮かべ答える。

「影法師、とか、
カゲホウシ

廻靈法師とか、
エレイホウシ

昔呼ばれた者、その転生者。もつとも、

旧宇宙から存在する貴様等は、本当の名を知るのだろうか」

男が目をみはり、そして背中をむけ逃げ出した。
少年が追う。

その手にはいつの間にか刀があった。

日本刀に似て、刀身は鎬高く火炎の刃紋。
が、その柄、壱束いっそく／片手一握り分の柄。

少年が刃をふるった。

ふるった太刀筋が見えず、

背後から斬られた男の体は粉々の肉片となり飛び散った。

少年は油断なく身構える。

そこに生じたどす黒く渦巻く瘴気に対峙する。
瘴気の渦のなかに獣の口が現われ開く。

止せ。契約をしろ。

地上で望みうるすべてを、貴様に与えてやる。

少年は口をゆがめて晒い、言う。

「宇宙開闢前の混沌のなかへ失せ果てる」

その刃で瘴気の塊りを斬りつけた。

一太刀目で小さな光が生じ、

二太刀目で光が広がり渦となり、

三太刀目でその渦が、

断末魔の悲鳴をあげる獣の影をのみ込んだ。

すべて消え失せ、
夜の闇と静寂が戻ってきた。

少年は、晒った。

その手の刀が、ふたたび冥界へと帰り、消えた。

少年の名は、タサキサノト 它崎菱人。

数ヶ月前、冥界の獣人からその刀を貰った。

それは妖刀であり、手にしたとたん彼の本質が変貌した。

普通の高校生だった本来の彼は、そのとき消えうせ、

恐ろしく冷徹な精神を持つなにかへと変貌した。

そして自身の使命を知った。

すなわち 。

この世界に潜む、悪魔、千八百九十二霊を斬り、

七邪神を滅ぼし、

さらに、

この宇宙の創造神、ルシフル 婁巳阜壘を倒す。

それによりこの宇宙を消滅させる。

その刀の名は、まが切り。

またの名を、渦生ひ。

冥界を経て、旧宇宙より伝わるもの。

残り、千八百八十八靈。

補黒文・靈冥解図、序（後書き）

あとがき

この五話をもって、設題とし、
しばらくお時間いただきまして、本篇を書き、
第一部校了しましたら掲載再開したいと思います

（長いお話しになると思われますので、
おそらく、第一部、第二部、といった構成になると思います）

当（）。人。（「2009、3、19」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3949g/>

霊冥解図

2010年10月11日02時56分発行